

令和4年度

教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業

実施テーマ：

多機関連携・協働とアジャイル型手法による
学習観転換科目及び教師の連携・協働科目の
開発と改善

授業計画（シラバス）試案

令和5年3月

国立大学法人 兵庫教育大学

授業科目名	学習科学と授業のリデザイン	
単位数	2単位	
授業方法	講義・演習	
標準履修年次	2年次	
学習目標、到達目標、ねらい	人が潜在的に持っている学びの力を引き出す環境をデザインするという学習科学の視点に立ち、他者と考えながら学ぶ授業づくり、そこでの教員の役割や評価等について学ぶ。	
授業の内容	<p>主な内容・テーマは次のとおり。</p> <p>①学習観の転換とその核心としての学習者観の転換（人はいかに学ぶか、社会構成主義を背景にした学習の再定義等）</p> <p>②新しい学習観・学習者観に基づく学習環境のデザイン（他者と考えながら学ぶ授業づくり、ファシリテーターとして果たすべき教員の役割、転換された学習観・学習者観に依拠した新しい評価のかたち等）</p> <p>20名程度のグループを編成し、そこに大学教員と大学院生がかかわる。すなわち、受講生、大学教員、大学院生による「学びのトライアングル」を構成して、授業を展開していく。</p>	
授業計画	第1回	オリエンテーション（オンラインか対面）
	第2回 ～ 第9回	講義（オンライン） 受講生は学習観・学習者観の転換に関する教育学や心理学等の学術理論や研究の知見について、反転授業方式を原則に学んでいく。オンデマンド教材の視聴を前提に、グループごとに質問を出し合ったり率直に意見交換したりしながら、理解を深めていく。
	第10回 第11回	演習（オンラインか対面） 教員一人ひとりの学習観・学習者観の転換にかかる経験が日常の実践とともに事例として収集・整理された汎用的学習材「事例集」を活用した学びを行う。ここで想定されているのは、次のような学びのプロセスである。グループにおいて他者と対話するなかで、事例に纏わる他者の経験を「聴く」、事例に纏わる自らの経験を「語る」「掘り下げる」、自らの経験を他者の経験と「比べる」、学術理論等と「突き合わせる」。そして、自らが自明的に前提していた観に「気づく」。

	第12回 ～ 第15回	まとめ：「学びの成果発表会」（対面） 2回を準備にあて、2回を発表会にあてる。発表はすべてのグループが行う。グループごとにテーマを設定するよう求める。テーマの例として、「なぜ学習観の転換が難しいのか」「転換された学習観のもとで新しい評価を実施するとしたら、具体的にどのような方法がありうるか」「転換された学習観をさらに転換する必要があるか。するとしたら、どのような学習観がありうるか」等。重視するのは、本授業の学びが次の新たな問いをいかに生み出すのか、思考の継続性である。
成績評価の方法・観点等	〔方法〕 グループワークや発表会における参加度・貢献度（40%）、授業中に提出を求めるワークシートの内容（30%）、全授業終了後に提出を求めるレポートの内容（30%）によって総合的に評価する。 〔観点〕 「グループワークや発表会における参加度・貢献度」に関する観点 主張の明確さ、内容のオリジナリティ、討論の活性化や他者の思考促進への貢献等 「ワークシートの内容」に関する観点 内容の理解度、思考の多面性、構成の論理性 「レポートの内容」に関する観点 授業で習得した知識の集約・整理、授業で扱った事柄に関わる自らの行動や思考についての考察	
テキスト・教材・参考書等	テキストは使用しない。参考図書については随時提示する。	
対応する新・教員養成スタンダード	07-学習観・授業観の転換	
事前事後学習	事前学習：各担当教員から指示される事前課題に基づき、自らの学びのありようを言語化すること（30時間）。 事後学習：授業を通して学んだ知識や視点に基づき、自らの経験について考察を重ねること（30時間）。	
その他	—	

授業科目名	ラーニング・ファシリテーションの理論と実践	
単位数	1単位	
授業方法	講義・演習	
標準履修年次	2年次	
学習目標、到達目標、ねらい	学習者中心の授業で求められるファシリテーターとしての教員の役割やファシリテーションに関する理論を学び、グループワークやワークショップの実践等を通して、ラーニング・ファシリテーションについての理解を深めていく。	
授業の内容	<p>主な内容は次のとおり。</p> <p>①ファシリテーターとしての教員の役割</p> <p>②ファシリテーションの理論とその展望</p> <p>③グループワークやワークショップの学校教育における展開可能性</p> <p>受講者全体を対象に展開する活動とグループ単位で取り組む活動を組み合わせて実施する。</p>	
授業計画	第1回	オリエンテーション（オンライン）
	第2回 ～ 第4回	講義（オンライン） 「ファシリテーターとしての教員の役割」「ファシリテーションの理論とその展望」「ファシリテーションの技法」等
	第5回	<p>演習：ワークショップ（対面とオンライン）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学習科学と授業のリデザイン」でファシリテーターを務めた大学教員と大学院生が、その経験から、ファシリテーションの実践上の課題等を析出するワークショップを行う。 ・受講生はそのワークショップを参観するとともに、ブレイクアウトルームの自動割当機能によって無作為に編成されたグループで、それについての意見交換を行い、ワークショップの実践上の課題等について理解を深める。
	第6回 第7回	<p>演習：模擬ファシリテーション（オンラインか対面）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講生（の一部）がファシリテーター役、参加者役となって、実際にファシリテーションを体験する。 ・課題は大学生活の中から設定する。 ・レコーディングしておいた動画を視聴しながら、大学教員と大学院生からよかった点や改善点等についてのコメントを受ける。
	第8回	<p>まとめ：シンポジウム（対面）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員、大学院生、選抜学生によるシンポジウムを行う。 ・テーマの一例として、「ワークショップやファシリテーションの学校教育における展開可能性と課題」等。

<p>成績評価の方法・観点等</p>	<p>グループワーク等における参加度・貢献度 (40%)、授業中に提出を求めるワークシートの内容 (30%)、全授業終了後に提出を求めるレポートの内容 (30%) によって総合的に評価する。</p> <p>〔観点〕</p> <p>「グループワーク等における参加度・貢献度」に関する観点 主張の明確さ、内容のオリジナリティ、討論の活性化や他者の思考促進への貢献等</p> <p>「ワークシートの内容」に関する観点 内容の理解度、思考の多面性、構成の論理性</p> <p>「レポートの内容」に関する観点 授業で習得した知識の集約・整理、授業で扱った事柄に関わる自らの行動や思考についての考察</p>
<p>テキスト・教材・参考書等</p>	<p>テキストは使用しない。参考図書については随時提示する。</p>
<p>対応する新・教員養成スタンダード</p>	<p>07-学習観・授業観の転換</p>
<p>事前事後学習</p>	<p>事前学習：各担当教員から指示される事前課題に基づき、自らの学びのありようを言語化すること (15時間)。</p> <p>事後学習：授業を通して学んだ知識や視点に基づき、自らの経験について考察を重ねること (15時間)。</p>
<p>その他</p>	<p>—</p>

授業科目名	子どもの安全と学校組織	
単位数	2単位	
授業方法	講義・演習	
標準履修年次	1年次	
学習目標、到達目標、ねらい	<p>学校安全に関する全体像を把握・理解し、学校内での安全管理（リスクの察知と対処・回避、事故発生時等の対応）について、具体的なイメージを持つことができる。</p> <p>学校安全の観点から、学校の組織と活動・施設の管理について理解する。</p>	
授業の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校安全」について、学校種ごとの留意点の違いを知る <ul style="list-style-type: none"> 就学前（幼稚園・保育所等）、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校では、児童・生徒の発達段階の違いや教育内容の違いに対応して「学校安全」の捉え方も違うということを、施設見学と関係者による講話を通じて学習する。 ・ケース教材を用いた「演習と講義」の組み合わせによる「学校安全」理解 <ul style="list-style-type: none"> 学校において直面しうる「学校安全」のリスク事象（学校における生活安全、教育活動中における事故への対応、不審者侵入への対応、登下校における交通安全、食物アレルギーへの対応）について、それぞれケース教材を用いた演習（1回）とその振り返りと解説（1回）を実施し、「学校安全」に対する組織的な取り組みについて、当事者意識を持った学習をする。 	
授業計画	第1回	イントロダクション、学校生活における「リスク」とは
	第2回	幼児教育・保育における「安全」（施設の見学と講話）
	第3回	小学校における「安全」（施設の見学と講話）
	第4回	中学校・高等学校における「安全」（施設の見学と講話）
	第5回	特別支援学校における「安全」（施設の見学と講話）
	第6回	学校における生活安全①（ケース教材の演習）
	第7回	学校における生活安全②（演習の振り返りと講義）
	第8回	教育活動中における事故への対応①（ケース教材の演習）
	第9回	教育活動中における事故への対応②（演習の振り返りと講義）
	第10回	不審者侵入への対応①（ケース教材の演習）
	第11回	不審者侵入への対応②（演習の振り返りと講義）
	第12回	登下校における交通安全①（ケース教材の演習）
	第13回	登下校における交通安全②（演習の振り返りと講義）
	第14回	食物アレルギーへの対応①（ケース教材の演習）
	第15回	食物アレルギーへの対応②（演習の振り返りと講義）
成績評価の方法・観点等	<p>ケース教材に関する演習の成果物・レポート</p> <p>演習の振り返りと講義に関する学習成果レポート</p>	

テキスト・教材 ・参考書等	文部科学省「『学校事故対応に関する指針』に基づく詳細調査報告書の横断整理」 文部科学省「第3次学校安全の推進に関する計画」など
対応する新・教 員養成スタンダ ード	03-学校の組織マネジメントと働き方 18-防災教育、学校安全
事前事後学習	—
そ の 他	—

授業科目名	教師の連携・協働と学校経営	
単位数	2単位	
授業方法	講義・演習	
標準履修年次	3年次	
学習目標、到達目標、ねらい	<p>学級における子どもの「支援」のバリエーションを理解する。</p> <p>子どもの支援における学校内外の連携パターンについて知る。</p> <p>学級・子どもの状況を分析し、学校内外の誰とどのような連携・協働のもとで支援を行うことができるか、方針を構想することができる。</p>	
授業の内容	<p>・ケース教材を用いた「連携・協働」の理解</p> <p>学校内における教師間の連携・協働や、教師と他の専門職（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど）との連携・協働、さらには学校・教師と外部機関（児童相談所等）との連携・協働などが必要となる場面を取り上げたケース教材について、グループワークによるケースの検討（1回）と、回答の共有と解説（1回）を組み合わせて実施する。これにより、教室内におけるさまざまな事象についての捉えを幅広いものとし、多様な連携・協働の方法と、連携・協働における留意点について理解する。</p>	
授業計画	第1回	イントロダクション・学校内外とどのような連携が可能か
	第2回	いじめの予防及び対応①（ケース教材の演習）
	第3回	いじめの予防及び対応②（演習の振り返りと講義）
	第4回	不登校・保健室登校への対応①（ケース教材の演習）
	第5回	不登校・保健室登校への対応②（演習の振り返りと講義）
	第6回	授業妨害・問題行動への対応①（ケース教材の演習）
	第7回	授業妨害・問題行動への対応②（演習の振り返りと講義）
	第8回	授業・学級経営における個別の支援①（ケース教材の演習）
	第9回	授業・学級経営における個別の支援②（演習の振り返りと講義）
	第10回	児童虐待（の疑いのある事例）への対応①（ケース教材の演習）
	第11回	児童虐待（の疑いのある事例）への対応②（演習の振り返りと講義）
	第12回	自死の防止①（ケース教材の演習）
	第13回	自死の防止②（演習の振り返りと講義）
	第14回	保護者対応①（ケース教材の演習）
	第15回	保護者対応②（演習の振り返りと講義）
成績評価の方法・観点等	<p>ケース教材に関する演習の成果物・レポート</p> <p>演習の振り返りと講義に関する学習成果レポート</p>	

テキスト・教材 ・参考書等	水野治久『子どもを支える「チーム学校」ケースブック』
対応する新・教 員養成スタンダ ード	03-学校の組織マネジメントと働き方
事前事後学習	—
そ の 他	—

授業科目名	多機関連携と学校防災	
単位数	2単位	
授業方法	講義・演習	
標準履修年次	3年次	
学習目標、到達目標、ねらい	<p>学校における「災害」のリスクを幅広く想定することができる</p> <p>学校防災にかかる地域住民・行政組織等との連携について、連携先が想定できる</p> <p>学校防災にかかる実践について、学校内外におけるコミュニケーションの特性を理解し、その対処法を想定することができる</p>	
授業の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「災害」について幅広く理解する <p>学校防災を考える前提として、「災害」を自然科学の側面・社会科学の側面の双方から理解する。あわせて、防災や災害発生後の対応において発生する事象に際しては、心理的側面や法的側面においても検討を要する点が発生することを、幅広く理解する。</p> ・多機関連携による「防災」を理解する <p>学校防災に関連する諸制度とその実際について学習し、災害発生に備える側面においても、また災害発生後の対応においても、学校の立地する地域の諸機関・諸団体との連携が重要であることを理解する。</p> ・実践的な学校防災を構想する <p>防災・減災の研究や、災害発生時の葛藤やコミュニケーションについて学習するとともに、実際に防災教育を行っている自治体の例に学び、児童・生徒や保護者・地域住民にどう防災を啓発するかというプログラムを構想し、授業全体の学習内容の振り返りと総合化を行う。</p> 	
授業計画	第1回	イントロダクション 防災を総合的に捉える
	第2回	自然科学的に「災害」を理解する
	第3回	社会的に「災害」を理解する
	第4回	防災における心理（インフォメーション・コミュニケーション）
	第5回	学校防災におけるリスク管理・安全配慮義務（裁判事例の検討）
	第6回	学校防災・都市防災の諸制度（関係機関・制度の概観、都市計画）
	第7回	施設の防災の実際（動物園・水族館・遊園地等の防災・安全配慮）
	第8回	学校防災における地域連携① 災害「前」・通常時の関係構築
	第9回	学校防災における地域連携② 防災拠点としての学校・地域連携
	第10回	災害発生時の思考・対処（「防災クロスロード」による葛藤経験）
	第11回	防災とメディア・コミュニケーション（広報の考え方）
	第12回	防災・減災研究との連携（「人と防災未来センター」との連携）
	第13回	学校防災の考え方①（南あわじ市・防災教育のコンセプト）
	第14回	学校防災の考え方②（南あわじ市・防災教育のプログラム）
	第15回	まとめ：効果的な学校防災プログラムを構想する

成績評価の方法・観点等	「中間まとめ」としての災害理解（レポート） 「最終まとめ」としての防災プログラムの構想（レポート）
テキスト・教材 ・参考書等	—
対応する新・教員養成スタンダード	18-防災教育、学校安全
事前事後学習	—
その他	—